

童話の口演（お話漫筆の六）

四〇

長尾豊

一

お話の口演がいつの頃からか實演と稱せられて、其の實演がさかんに成らうとしてゐる。實ははじめの間に口演も實演も同じものだらゝに考へて居たが、此の頃ではどうやら實演といふものが別にあるやうにも考へられて來た。幼稚園や小

學校のお話口演、お話の時間に話され聞かれますものと、別に子供會などで話される實演とは、めつたに混淆出來ぬやうにも思はれて來た。

と言ふのが實演家の多くは、ある話を持つて變つた場所へ出掛ける人であり、保育室や教室でのお話といふものは、同じ場所で同じ人を相手にし

ての仕事である。そこで今假に實演家がタツタひとつの話を持つて甲地から乙地、丙丁……と巡講し、保育室や教室でタツタひとつの話を毎日々々聞かせたとしても、其の間には大變な違ひがあると思はれる。

實演の多くは外に出掛けての仕事で、従つて其の度毎に變る場所なり相手になりに對して準備もすれば時によつては警戒もしなければならぬ場合も起り得よう。實演家はよく「登壇するまで」といふことを喧ましくいふ。肩が下つてはいけなやか、壓迫を感じてはいけなやか、まるで試合にでも臨むやうな事を言ふが、保育室や教室のお話

にこんな注意や研究は全く不必要であると思はれる。時には却つて有害でさへあると思ふ。

實演家が其の研究をするのは必要上止むを得ずするのであらうが、同じくお話であるからと言つて保育室や教室でお話をする人達までがさういふ風になつたらう、折角の注意や研究も所をあやまつた何にもならないものとならう。さういふ事は宜しく實演家に一任すべきである。

二

話術の修行といふ言葉も少しく異様に聞えるが、いづれお話をするのは一種の技術であるから、話術でも何でも好いとして、扱保育室や教室でお話をする人の技術と、百人千人を集めこの實演家の話術とでは、違ふ所がなければならぬ。其の相違を無視して實演家の戦法のやうな技術を學んだら、狭い所で大長刀を振廻すといふ結果にも立到らう。

職業的な専門的な話術者と、これらの實演話術家との間に距離があるやうに、實演話術家と教育的な話者との間にも相當の距離があつて好い筈である。それと同時にすぐれた實演話術家が職業的な専門的な話術者から學ぶべきものは學び、攝取すべき所はつとめて攝取を怠らないやうに、教育的な話者もこれらの實演話術家から學ぶべく、攝取すべきことは決して少なくはないであらうが、只其の攝取し方、用ひ方が問題である。聞くところによると今の實演家の練習方法のひとつとしては、大家の話しぶりを其のまゝ真似るといふ事があるさうだ。考へやうによるとこれはカナリに危険な話である。なぜと言へば素人で真似をして似せられるのは先づ大抵缺點短所の方が多いからである。

「或所に狐がゐたんですつて、すると其の近所に、狼がゐたの。狼知つてるでしょ。」といふやう

な話方は、堂々たる實演風の話術から學ぶべきものがあらう。けれどもそれと同時にお話をするといふよりはむしろお話を讀む、朗讀の心持からも、學ぶべきものがないであらうか。きはめてユツクリ落着いて讀んで聞かせる、お話を讀むといふことも確かに一つの技術である。

三

人によると「しました。」のつく話を嫌ふ人がある。「ました。」があると話憎い、多少ヨソ／＼しく改まるので固くなるのか、「ゐたの」「ゐたんですつて。」で柔味をつけたり、又は説明句なしの目ま苦しい擬聲と動作で、幼い子供達をヤンヤと言はせたり、又茫然とさせたりして、十分分つたもの、話を通じたものと思つてゐる人もある。けれどもさういふ話の多くが、實は分らせたり傳へたりするのに十分何物をも持たず、又きはめて稀薄である場合が多い。

お話を與へるならばお話の形として與ふべきで年齢等による形式の相違も、實はお話として考へられなければならぬ。ほしいまゝな兒童化や動物化のみがそれをよくするのではない。其のためにお話をする人は、肩や手がどうかうと態度身ぶりにつとめるよりも朗讀吟誦諷詠などの、外にも參考とすべきものがないわけではない。やさしい美しい文體のお話を讀むことは、やがてお話をしで聞かせる階梯とならうが、それにはいかゞはしい假作物などでない筋目の正しい童話、幼兒童話等で始められるべきものと思ふ。

殊に幼兒にあつてはオラル・リテラチュアとしての童話といふ、大切な役目がある。實演童話といふものは、まだ其所まで到達しては居ないやうである。擬聲物眞似の話方では、始めからそんなことは考へて居ないやうである。でなければ少なくもあゝいふ話方を考へつく筈がない。